802　柴田甲四郎君近信

〔『法学新報』第34巻7（390）号　大正13年7月4日〕

○柴田甲四郎君近信　中央大学留学生柴田甲四郎君より佐藤本学理事宛近信あり左に之を掲く

謹啓愈々御情詳（清祥カ）奉賀候降而野生無異修学罷在候間乍他事御安心被下度候承はれは吾か中央大学罹災後大なる困難を排して既に復旧致候趣之偏に学校理事殊に尊台の御尽粋の賜にして誠に感謝に不堪候時に野生の帰朝期は研究の都合上不得止延引致居候処稍々所期の志望を達したるを以て愈々来る八月当地を引上け帰途に上る筈に御座候帰朝候らはは当分の間専心母校に於て講義旁々勉強以て当地に於ける素養を完成したき希望に御座候も御存じの通り自活の必要あるを以て罹災後の今日に於て母校に於て生活の保障を与へらるゝこと不能の状態に御座候はは自然傍ら弁護士を為して生活を持維（維持）するの方針に出さるへからさるに至るへく候要するに此点は帰朝の後御相談の上決定致度候

野生の担当として若し新学期より講義を課せらるゝに於ては予め御一報願上度野生は七月中伯林に罷在る可く候間未た往復の遑も御座候目下野生巴里に在り仏語の研究罷在候天野教授は非常の御勉強にて短日月の間に読書力を養成せられたることは誠に驚かさるを得す仏国は学問上決して軽視すへからさるのみならす近時の社会法学に於て頭角を表し居り候へは法学者の研究を怠るへからさる所同君の仏語研究は将来裨益する所鮮少ならさるを信じ申候思ふに吾人学徒の任務は当に大震の為め被れる打撃に抗して吾か文化の程度を抵下（ママ）せしめさるにありて恰も独逸か凡ての経済を破壊せられたるに拘はらす学者は毅然として学問芸術の権威を維持し以て其文明国たる誇を傷けさるに努力したる如く我邦に於ても此精神を以て難局に処すへきは必然に有之候殊に西洋人は口に我邦の一等国たるを曰ふも心には未た半開国の如く信する者あり此点に於て吾人は常に不愉快と不満足を感し来りし所に候顧みれは我邦に於ては未た真に文化の独立なきを以て吾人は先つ事実に於て吾か文化の内容を充実し以て外形内容共に真に世界優秀の地位に立つへく努力せさるへからす候世界大戦後我国に於ては人心の放慢経済の不振甚しきに加へ今回の天災に遭（遇）愚し其惨状言ふへからす国民の動揺思想の混乱甚しきは察するに難からす候幸に吾か中央大学は剛健質実の美風を擁して終始一貫せるは頗る人意を強くする所に候処近時空しく其名

を存して其実の伴はさるを聞かすんはあらす候今や時勢の変遷急なるの時に際会し宜しく剛健質実の真の内容を垂示して以て学生をして其方向を誤る所なからしむるは当に識者の任務なりと云はさるへからさる次第に候

右御報労々如斯に候学長閣下を始め諸先生には貴下より宜敷御鳳声願上候臨終遥に老台の御健康祈上候謹言

千九百二十四年五月三日於巴里　甲四郎九拝

二伸　地震の為め発送を見合せ置きたる母校の書籍は小生の荷物と共に送附可致候